

第4学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「言葉を選んで詩を書き、友達と読み合おう」 教材名「心が動いたことを言葉に」

2 単元の目標

気持ちや様子を表す語句を増やし、詩の中で意味や響きを確かめて使える。書こうとしたことが明確になっているか感想を伝え合い、自分の詩の表現のよさを見付けられる。言葉の働きを確かめ、友達との交流を基に自分の学習を見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①気持ちや様子を表す語句を増やし、詩の中で意味や響きを確かめて使っている。（〔知識及び技能〕(1)オ）	①「書くこと」において、書こうとしたことが明確になっているか感想を伝え合い、自分の詩の表現のよさを見付けている。（B(1)オ）	①学習の見通しをもち、単元で確かめたいことに進んで取り組み、友達の言葉や自分の記録を基に、読み方・表し方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

（1）単元について

気持ちが変わったときの様子を表す言葉を選んで詩を書き、読み手に浮かんだ様子と作者の意図を比べる。好みの評価で終わらせず、どの表現によって何が伝わったかを交流する。学習指導要領のB(1)オを中心に据える。関連する知識・技能として〔知識及び技能〕(1)オを、言語活動の中で確かめる。年間計画の重点項目に加え、本案では〔知識及び技能〕(1)オを活動に関わる事項として扱う。

（2）児童について

（学級の子どもの様子を先生が書く）

（3）指導について

作者は先に意図を説明せずに詩を読んでもらう。読み手は印象と、その根拠の言葉を示す。作者は感想を聞いた後で残す表現と直す表現を選び、その理由を話す。おおむね満足できる状況は、書こうとしたことが明確になっているか感想を伝え合い、自分の詩の表現のよさを見付けているという姿で捉える。語句や本文を示さず結論だけ述べる場合は、根拠を確かめる支援を行う。発言の回数や記述の長さでは判定しない。

5 指導と評価の計画（全7時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○気持ちが変わった出来事を思い出し、そのときの音や動き、色などを言葉にする。	学習状況を見て支援する。
第2次	2	○最も表したいことを選び、語句の響きや並べ方を試す。	知①（語句や内容の整理）
	3	○詩の下書きを書き、声に出して読みながら語句を選ぶ。	学習状況を見て支援する。
	4 （本時）	○読み手に浮かんだ様子を聞き、表したかったことが伝わる表現を確かめる。	思①（発言・学習記録）
	5	○感想を受け、残す表現と直す表現を決めて推敲する。	学習状況を見て支援する。
	6	○詩を仕上げ、表現のよさを添えて交流する。	学習状況を見て支援する。
第3次	7	○下書きと完成稿を比べ、選んだ言葉の働きを振り返る。	態①（学習前後の記録・振り返り）



6 本時の指導 (4/7)

(1) 本時の目標

書こうとしたことが明確になっているか感想を伝え合い、自分の詩の表現のよさを見付けられる。

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・ 予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	本時に使う教材・前時までのノートを確認、自分の最初の考えを短く書く。 ○「書いた人が表したかったことは、どの言葉から伝わりましたか。同じ様子が浮かんだ所と違った所はどこですか」 【めあて】気持ちが変わったときの様子を表す言葉を選んで詩を書き、読み手に浮かんだ様子と作者の意図を比べる。 〈予想される児童の反応〉 ・ 動きを表す言葉から驚いた感じが伝わった。	本時に考える対象を確認し、既に確かめたことと、今日確かめたいことを分ける。児童の最初の言い方を残し、まとめて比べられるようにする。
展開 (分)	○「書いた人が表したかったことは、どの言葉から伝わりましたか。同じ様子が浮かんだ所と違った所はどこですか」 自分の詩を読み合い、表したかった場面がどの語句から伝わったか感想を返す。書き手は表したかったことと感想を照らし、自分の詩のよい表現とその理由を記す。伝わりにくかった箇所は言葉や響きを確認め直す。 〈予想される児童の反応〉 ・ 動きを表す言葉から驚いた感じが伝わった。 ・ 同じ言葉の繰り返しが印象を強めている。 ・ 説明を減らした方が、自分の表したい景色が伝わりそうだ。	作者は先に意図を説明せずに詩を読んでもらう。読み手は印象と、その根拠の言葉を示す。作者は感想を聞いた後で残す表現と直す表現を選び、その理由を話す。 想定する難しさ：技法を使った数でよさを決める。読み手の意見を全て受け入れて作者の意図が消える。 児童の考えを教師の想定した言い方にそろえない。理由が確かめられる考えは残し、根拠が異なるときはその違いを板書する。 ◎思① 書こうとしたことが明確になっているか感想を伝え合い、自分の詩の表現のよさを見付けている。(自作の詩・相互の感想・自分の表現のよさを記した文)
まとめ (分)	【まとめ】今日確かめた言葉や表現と、それによって確かめたことを対応させて自分の言葉でまとめる。 学習前の考えと比べ、付け加えたこと、残したこと、その理由を記す。 〈予想される児童の反応〉 ・ 友達の考えを聞いて、自分の理由を詳しく説明できた。 ・ 説明を減らした方が、自分の表したい景色が伝わりそうだ。	まとめの文を先に与えて写させず、児童が本時に扱った実際の言葉を入れる。書くことが難しい場合は口述を記録する。次の学習では、その記録を使って自分の表し方を確かめる。 ◎態① (学習前後の記録と、見直した理由)

(3) 板書計画（縦書き・右から左へ）

右端に題名と本時のめあて。その左に問い「書いた人が表したかったことは、どの言葉から伝わりましたか。同じ様子が浮かんだ所と違った所はどこですか」。中央は根拠となる言葉・本文の箇所と、そこから考えたことを上下に対応させる。根拠の本文は先生が教科書から書き入れる。中央から左に児童の考えを並べ、同じところを囲み、違いの理由を線で結ぶ。左端に、本時で確かめた実際の言葉を含むまとめと、考えを見直した理由を書く欄を置く。縦書きで右から左へ学習の順をたどれるようにする。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

